

不登校抑制要因及び校内不登校支援体制に関する研究

A Study of Effective Factors in Preventing School Non-Attendance and In-School Support System for Non-Attendees

日高 なぎさ (HIDAKA Nagisa)

2007年度学校基本調査速報によると、昨年度に不登校で学校を30日以上欠席した小中学生は計12,9254人となり2年連続で増加したことが、文部科学省より報告された(朝日新聞、2008年8月8日)。

このようにストレス社会の影響を受けて不登校になる児童・生徒は依然として多く、我が国においてもその予防策の検討が急務となっている。

従来から不登校の原因や不登校生の性格特徴、家庭の特徴など、不登校児童・生徒を対象とした研究は数多くなされてきたが、逆に一般の児童・生徒が「なぜ不登校に陥らなかったのか」については十分に研究されていない。

一般児童・生徒を対象とした研究としては「学校ざらい感情」や「登校忌避感情」などについての調査は行われているが、一般児童・生徒がそのような登校を嫌がる感情を有しながらもなぜ登校し続けたのか、不登校に至るまで重篤化しなかったのかという不登校への移行を抑制した要因についての分析はまだなされていない。このような不登校抑制要因を明確にすることは、一般児童・生徒のメンタルヘルスの向上に役立つだけでなく、不登校の出現を未然に防止する予防的観点からも極めて有効と考えられる。

そこで、本研究では不登校に陥らなかった健常児を対象とし、彼らに今まで登校をしぶつた経験の有無や、渋った理由、さらには登校を渋ったにも関わらず、なぜ不登校に陥ることがなかったのかについて、アンケート調査を実施し、その回答をもとに、不登校の助長・抑制要因を検討することを目的とした。

調査対象は大阪府下のX市の中学校3校の男子196名、女子196名の合計392名である。その内訳はA校195名(男子97名、女子98名)、B校98名(男子47名、女子51名)、C校99名(男子52名、女子47名)である。学年はB校、C校については中学1～3年生までを各1クラスずつ、A校については各学年2クラスずつ調査した。なお、欠損値については除外して分析を行った。

登校を渋った経験については、全学校で「よくあった」が12.05%(47名)、「ときどきあった」が14.87%(58名)、「たまにあった」37.18%(145名)、「まったくなかった」35.90%(140名)という結果となり、390名中107名(26.92%)の生徒が潜在的な不登校の可能性が示唆された。

また、男女別で比較したところ、男子においては「よくあった」が8.16%、「ときどきあった」が13.27%であり、登校忌避経験の多い生徒は合計21.43%であったが、女子においては「よくあった」が15.82%、「ときどきあった」が16.33%であり、合計32.15%もの生徒が登校忌避経験があり、女子においてより顕著であることが明らかになった。